



The Red Stars

●編集・発行:蜂起社/東京都江東区大島3-9-25 ●本号200円(隔月発行)年間購読料:1部2000円(送料込)

改憲・辺野古新基地・原発・格差にNO! STOP!安倍暴走政治



6万5千人が集まった「被害者を追悼し、海兵隊の撤退を求める」6.19沖縄県民大会「沖縄の怒りと悲しみは限界を超えた！」



6.12沖縄意見広告運動報告集会 特別ゲストに米元陸軍大佐のアン・ライトさん

壊憲隠しの安倍暴走政治

今回の参院選も安倍政権与党の圧勝に終わった。改憲を阻む「3分の1」の壁が崩れた。憲法は重大な岐路に立ち、「まさに戦後政治の分岐点である」(7.11朝日社説)。

野党は沖縄で伊波洋一さんが現職大臣の尻を破ったものの、壊憲隠しの安倍暴走政治にブレーキをかけるには至らなかった。安倍政権は議会での圧倒的多数を頼みに改憲をはじめ辺野古新基地建設、原発再稼働、そしてアベノミクスによる格差拡大に、一段とアクセルを踏み込もうとしている。「選挙の季節」は終わった。安倍政権に抗う草の根からのうねり、その直接民主主義の底力が、いよいよ試される時だ。

今回の参院選は、違憲の安保法制と改憲策動、そしてアベノミクスの破綻を問うと同時に、この国の民主主義の在り方そのものが問われる選挙であった。「日本の民主政治は今、危機に瀕しているのではないか」(毎日)と指摘されるように、その元凶は紛れもなく安倍政権の暴走政治にある。

では何年に1度の選挙(投票)によって、これにブレーキをかけられるであろうか。はたして投票所に足を運び議員を選び政治を委任する(制度的議会政治)だけで

この「民主主義の危機」を乗り越えることができるのだろうか。答えは「否」だ。民意を反映しない小選挙区制による投票率の低下傾向に歯止めがかからない。既成政党が代表する制度的政治の劣化はますます深刻化している。こうした代議制(間接)民主主義の限界や機能不全、危機に直面している時だからこそ、その制度的議会政治によらない体制外(非制度的回路)からの草の根の直接行動を通して、直接民主主義―草の根民主主義の意識と行動を高めながら変革を起こす他にない。それ以外に「民主主義の成熟度」を高めることはできないといえる。草の根の直接行動を不断に育んできた沖縄の闘いから学ぶならば、直接民主主義の脆弱さが、今日の「本土」ヤマトの制度的政治の劣化、その結果としての安倍暴走政治を招いたといえるのではないだろうか。だとしたら迂遠であったとしても、何よりも選挙による代議制が民主主義の全てではないことを示すためにも、草の根から直接民主主義を鍛え直すことなしに危機に瀕した民主主義を根本的に再生することはできないであろう。

イラク参戦英国検証報告

2003年3月に始まった米国主導のイラク侵略戦争に英国ブレア政

権が参戦する経緯等を検証した独立調査委員会の報告書が7月6日、公表された。軍事行動を起こすだけの法的根拠に乏しかったと当時のブレア政権の判断の誤りを厳しく批判するものだった。

英国では、イラクを対テロ戦争の標的に定めたブレア政権への批判が13年たった今もくすぶっており、イラク戦争は「間違っていた」との認識が広く共有されている。イラクに大量破壊兵器があり、戦争をしなければ英国や世界が危機に陥ると「不安」や「脅威」を歪んだ形で誇張し対テロ戦争への参戦を正当化したが、全ては嘘だった。世論の反対をおしきって米国に追随し参戦したが、戦争の大義とされた大量破壊兵器は見つからず、多くの犠牲(イラク市民16万2千人以上)をもたらした上、「平和」にもつながらなかった。それどころかイスラエルの利益が絡んだ対テロ戦争自体が、ISを生み出しテロを拡散させた。米プッシュと英ブレア政権には、今日のイラクをはじめ中東情勢の混迷とIS勢力伸長の種を蒔いた直接の製造責任がある。

米国でも上院情報特別委がイラク戦争に関する報告書を取りまとめている。08年の同委員長ロックフェラーは「プッシュ政権は偽って米国を戦争に導いた」との声明を発表している。オランダでもイ

ラク戦争は国際法上違法であるとする報告書をまとめている。当時の小泉政権は、米国に追従してこのイラク戦争を即座に支持しイラク復興支援特措法を成立させ「後方支援」と称して現地に自衛隊を送り込んだ。だが米英などがこのようにイラク戦争に関する厳しい検証を重ねる一方、日本は民主党政権時代の12年におさなりの資料を発表しただけで徹底検証とはほど遠いものであった。

この英国のイラク参戦検証報告に関して7月8日の朝日社説は、「戦争を主導した米英も過ちを認める開戦の根拠について、安倍首相はじめ日本政府はいまだに正当化し、自ら加担した責任を認めようとしていない」と批判し、安全保障法制が施行された今こそ、「日本にとってのイラク戦争を検証することから始めるべきだ」と指摘した。また東京新聞社説(7.8付)も「戦争を支援した日本政府も、その判断が正しかったのかを検証し、公開する必要がある」と述べている。

毎日のコラム(7月9日、青野由利)では、「確かに、参戦自体は大間違いだった。ただ、何年たとうと過去の過ちは徹底調査して、将来に役立てる姿勢はさすが。それに引き換え日本は、と思わずにはいられない。イラク戦争では米国に追随しておきながら、

徹底検証はしない。……過去の検証をおろそかにしては、未来も選べない」と指摘。

イラク戦争を徹底検証し、過去の過ちから教訓を導き出して学ぶとする姿勢があるかないか。それが偏狭な愛国心やナショナリズム・国家主義によって参戦に駆り立てられることを阻むためには、不可欠な政治課題といえる。米国の尻馬に乗ってイラク戦争に参戦した結果、甚大な犠牲・代償を払ったことが、今回の英国の検証の動機となっていることは間違いない。私たちは、これを他山の石として、この国の民主主義の有り様を徹底検証すべきであろう。英国の議会政治と比べると日本の政治は、まったくおさなりで無責任極まりない。こうした既成政党による制度的政治の劣化は、安倍暴走政治によって一段と深まっている。これに歯止めをかけられるのはもはや議会内野党ではない。安保法制が施行された今、米国の尻馬に乗って参戦すれば、どのような悲惨な結果を招くのか、そのことを訴え、右傾化・保守化する世論を変えていかねばならない。

そのためには草の根民主主義に基づいた直接行動によって、反戦意識・権利意識を高め改憲阻止のうねりを起こすことこそ肝要であり私たちの喫緊の課題である。

(赤星隆樹)

7月
発刊

21世紀★世界は変えられる！

世界に響く革命のプレリュード

原 隆 著 発行／社会評論社

目次

プロローグ
パラダイム・シフトを迫られた
思考一行動様式

第I部 21世紀のデモクラシーとは
何か

第1章 危機か再生か、岐路に立つ民主主義

第2章 民主主義 再生への道

第3章 草の根民主主義のうねり

第4章 21世紀の希望のコミュニケーション

第5章 沖縄の自決権

第II部 21世紀のプロレタリアとは
何か

第1章 現代社会の階級論

第2章 マルクス階級論の再構成

第3章 現代のプロレタリア

第4章 労働者階級内の階層分化

第5章 プロレタリア概念の再創造

第III部 21世紀の世界を変える
新機軸とは何か

第1章 未来に種を蒔く希望の道

第2章 反格差運動への招待

第3章 パレスチナに自由を！

エピローグ
希望と情熱の灯火を！

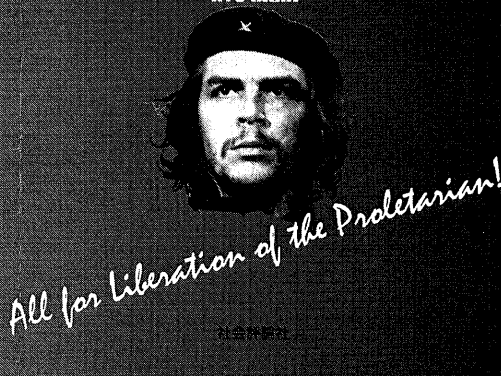
21世紀★ 世界は変えられる！

世界に響く革命のプレリュード

原 隆 *

21C. WE CAN CHANGE THE WORLD!
PRELUDE TO REVOLUTION!

RYU HARA



私たちは現在、どんな時代を生きているのか。社会は、どのように成り立っていて、どんな矛盾や問題を抱えているのか。人間として、いかに生きるか。社会のため人のために何が出来るのか。世界や情勢をいかに捉えどう闘うべきか。私たちは、どんな未来を目指すのか。人間らしく生きられる社会とは、そのあるべき方向性とは何か。私たちの未来を閉ざし変革を妨げている現実とは。世界を変えて、自分自身も変わるとは。情熱とは。希望とは。理想とは。こんな割り切ることができないようなことを考えたり、悩んだり、自問しながら、一步を踏み出せずに逡巡し立ち止まっている人、また一步を踏み出そうともがいている人、そういう人たちに、本書は手に取ってもらいたい。世界を変えるために、真に役立つ中身の濃いものになるものを「読みたい」、もっと「学びたい」、そういう思い（とりわけ次世代のそれ）に応えることが、私たちの責任でもあると考えている。

希望と情熱の灯火を！

本書を世に出すことは、私にとって10年来の悲願だった。この「時期」に、私に出版を決意させたのは、およそ3つの動機、背景というか時代の後押しのようなものを感じたからだ。

第1に、昨年、国会前を埋め尽くした安保法制反対のデモに象徴される、草の根の連帯に基づいた大衆的でダイナミックな直接行動の新たなうねりである。

第2に、劣化して危機にある制度的政治一代議制に対して、またグローバリズムに伴う格差・不平等の拡大に対して、非制度的回路（体制外）から草の根レベルで民主主義（デモクラシー）を取り戻そうとする意志と行動の表れ、しかもその世界的同時的な進行である。

第3に、こうした①草の根の連帯、②非制度的体制外の直接行動、③草の根民主主義（グラスルーツ・デモクラシー）—この3点をメルクマール（指標）とした「新たな変革のうねり」がおし寄せ、またとない「時機」の到来にもかわらず、この国の左翼は、すっかり淀んでしまっただけで存在感すら失ってしまったことだ。

「変革の予兆」に満ちた時代を迎えて、私は潮目が変わったことを実感した。世界を変えるために、「未来は変えられる！希望は取り戻せる！」そういう人の心に響くメッセージを今こそ届けたい、「このままでは終われない」、と思ったからである。それが本書を出すに至った最大の動機である。

本書を、いまは亡き山岡強一、新里金福、全泰啓（チョンテイル・韓国）、ガッサン・カナファーニ（パレスチナ）、ステファン・エセル（フランス）、そして50年前、革命の途上で斃れたチェ・ゲバラに捧げる。

7月22日取次配本予定
定価／1700円＋税（174頁）

本書の主な論点を紹介するために以下はプロローグとエピローグから抜粋したものである。

パラダイム・シフト迫られた 思考一行動様式

時代は大きくうねり、いまや世界中で「革命の序奏（プレリュード）」が響いている。私たちは今、虐げられし持たざる者—プロレタリアが、自らの解放のために国境を越えて連帯し、資本主義に対する蜂起・反抗・逆襲を拡大しながら新しい時代の扉を開こうとする大きな変革の時代—革命途上の「過渡期」を生きているのである。それは政治・経済・社会の枠組み（パラダイム）が根本から大きく変わってしまうような変革期に、私たちが立ち会っていることを意味している。

では何故いま、「デモクラシー」なのか、「プロレタリア」なのか。それは、ここに、時代の大きな変化を捉える手掛かり、キープポイントがあるからだ。すなわち、草の根民主主義（グラスルーツ・デモクラシー）が、いま世界に「新しい変革のうねり」を起こしている。それを基調にして格差・貧困に苦しむ99%—持たざる者・プロレタリアが、世界的同時多発的に資本主義グローバリズムへの怒りに燃えた逆襲を始めているからである。

草の根民主主義のうねりは、人々・プロレタリアの深い部分での意識変化に根差している。それは劣化した制度的政治一代議制に対する怒り、そして新自由主義・グローバリズムがもたらした格差・貧困・不平等に対する燎原の火のように広がった怒りの反乱—2011年の欧州「インディグナードス（怒れる者）」、米国の「オキュパイ・ウォールストリート」に象徴されている。街頭での抗議や

広場の占拠といった非制度的回路による直接行動を可視化することを通して、「人間らしく生きられる権利と尊厳」を取り戻すために、草の根から「真の民主主義」を戦い取ろうとする「新しい変革のうねり」である。このうねりは、世界中に大きなインパクトを与え瞬く間に広がっていった。日本では2011年3.11福島原発事故以降の反原発運動や15年8.30国会周辺を12万人が埋め尽くした安保法制反対デモ、台湾では14年のひまわり運動、香港では雨傘運動という形になって波及した。私たちに新たな変革の息吹を感じさせ、インスピレーションを刺激してくれたといえる。

こうした20世紀の闘い方とは様相を異にした新たな情勢の到来は、私たちに旧来の常識や既成概念に囚われた思考一行動様式からの脱却—パラダイム・シフトを迫っているのである。時代とともに変化する情勢に、いかに対応すべきか、反資本主義運動の新機軸—新しいイニシアティブをいかに創造しうるかが、問われているのだということを肝に銘じる必要がある。ところが旧来型左翼の大半は、この「新しい変革のうねり」ともいえる草の根民主主義を基調にした新しいタイプの社会運動に対してまったくと言っていいほど無関心であったり、無視するか退ける傾向にある（A・ネグリやD・ハーヴェイも批判）。60—70年代のステレオタイプ化された思考一行動様式や戦略から脱却できず、いまだに踏襲できると思い込んで時代錯誤に陥っているからだ。このような21世紀の新しい「時代の要請」に応えられない、あるいは応えようとしないう旧来型左翼は、存在意義を失い廃れていくばかりであろう。そのことへの危機感こそが問われているのである。淀んで廃れゆく旧来型左翼

か、再生を期して自ら変わろうとする左翼か、その分水嶺をなすメルクマール（指標）が、まさに「デモクラシー論」と「プロレタリア論」の再構成にある。

本書の基層を貫くテーマは、まさに「21世紀の世界を変える」ため、未来に「革命の種を蒔く」（ゲバラ）ために、自らの「立ち遅れ」や「淀み」に無自覚ですっかり時代遅れになってしまった左翼の思考一行動様式を変えることにあり、マルクス主義のイニシアティブを再創造することである。時代の変化に対応して世界を変えるには、その変革を担う主体自身も変わらなければならないからである。

要するに、思考の「劣化」が行動様式や政治文化の「淀み」をもたらし、今日の左翼の立ち遅れと退潮を招いたといえる。

したがって私たちは、こうした時代遅れでステレオタイプの淀んだ旧来型左翼と「同類」と思われることは心外なのである。そう見なされるようではおよそ左翼再生の展望はありえないからである。では伝統的正統派（オーソドックス）の左翼と「どこが違うのか」、同類ではないこと、異色な左翼—アンチ・オーソドックス、ラディカル・レフトであることをどのように明瞭に示していくことができるのか。ステレオタイプの見えない衣をまとったオーソドックスの旧来型左翼をいわば反面教師として、異色で斬新、ユニークな観点人を人の心に届くように訴えることができなければ、ラディカル左翼の再生は成しえないのである。

グローバリズムが世界を席卷し、それに伴う反作用（アンチノミー）としてナショナリズム・国家主義が台頭する21世紀の今日において、世界を変えるためには、グローバル資本に対抗する新機軸

を打ち立て、それを担う変革主体を形成することが不可欠である。そこで私は、その思想的なモーメントになりうるのは、やはりマルクス主義を描いて他にないと考える。それゆえマルクス主義の根本思想を再創造するという議論を深めていくためにも、「デモクラシー論」と「プロレタリア論」を21世紀の今日にいかに再構成することができるのか、というテーマを取り上げることが最も重要な課題であると考えた。言い換えるとマルクスとレーニンの思想の根本にあるこの「デモクラシー論」と「プロレタリア論」を再構成することができなくて、マルクス主義を21世紀に甦らせることはできないということだ。そのためにも、私は、マルクスやレーニンの思想について従来のありきたりで陳腐な通説や誤った既成概念を破ること—パラダイム・シフトを通じて、「そんなことも言っていたのか、そういう読み方、捉え方もあるのか」と見直すきっかけを提示することに注力したつもりである。

本書の「独創」は、旧来の常識や既成概念に囚われた思考一行動様式のパラダイム・シフトを目指して、21世紀の「デモクラシー」と「プロレタリア」を取り上げたことにある。

I部の「21世紀のデモクラシーとは何か」とII部の「21世紀のプロレタリアとは何か」は、21世紀の世界を変えるために避けて通れないテーマであること、そしてマルクス主義の根底にある思想を21世紀の今日に再創造するためにも不可欠なテーマであることを述べている。III部の「21世紀の世界を変える新機軸とは何か」は、私自身がNO-VOX（「声なき者」）の国際ネットワークで取り組んできた「反格差運動」や「パレスチナ連帯運動」について理解を深めてもらうための論稿である。